匂い

20230429

エリー

目次

本文 1

本文

　芳子は俊樹の首筋に顔を近づけた。視界いっぱいに肌色が広がる。息をする度、目の端で微かに喉仏が動く。
　生きてここにいる。
　少しツンとする酸味のある芳香に、青臭さが混じり、若さを感じさせる。
　他の部分はどうだろう？
　服の上からは匂わない。Ｙシャツやズボンをこえて、爪先まで移動する。
　好奇心に支配された芳子は、俊樹の気持ちなど想像しない。
　片足を持ち上げ、靴下越しに匂いを嗅ぐ。
　爽やかさに、男臭さが加わり、野性味を感じさせる。
　靴下に手をかけた瞬間、俊樹が口を開く。
「芳子さんの匂いも嗅がせてよ」
　服に片手を突っ込み、芳子が何度か手を動かしている。
　自分で嗅いだあと俊樹の鼻に近づける。
　胸の下側の匂いを自分で時々嗅いでいた。俊樹も好きになるか知りたい。
「直接嗅ぎたい」
　芳子の目をじっと見詰める。
「ダメよ。おっぱい見えるから」
　そう言うときゃっきゃっと幼子のように笑いながら芳子は去った。

　窓際の椅子に座り、芳子がぼんやり夕日を眺める。
　光明が近づいても芳子は上の空だ。
「なにぼんやりしてるの？」
　うつむき寂しそうに芳子がつぶやく。
「匂いを思い出そうとしてるの」
　足元にしゃがみ、光明が顔を覗き込む。
「旅先で出会って楽しかったけども、現実感がまるでないの。本当だった証しに匂いを覚えようとしたけど……思い出せない。嗅いだらこれだとおもうのに」
「帰さないよ」
　突然、俊樹が現れる。
「そんな悲しい理由だったの？」

　いつの間にか光明が姿を消して、芳子と俊樹は二人きりになる。
「僕が好きだから匂いを嗅ぎたいのかと思ってた。だから好きにさせてたのに」
「好きだよ、でも」
　逃げようとする芳子を俊樹が後ろから抱き締める。
　抵抗できない。したくない。
　嗅ぎなれた匂いに包まれ、夢心地の芳子は結婚を承諾していた。

匂い20230429

著　　ELYE

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社